

# 事例研究報告

**中学部生徒が情緒の安定を図り、  
安全に食事を楽しむための指導**

# 生徒の実態

## 【給食の食形態】

- ・きざみ食
- ・軟飯

## 【食事中の様子】

- ・全介助
- ・食事の途中から泣き出すことがある
- ・舌で数回押し潰しながら、そのまま飲み込んでいる
- ・舌は前後の動きはあるが、左右の動きはほとんど見られない
- ・水分はコップで一口(約6CC)ずつ飲ませている

## 保護者の願い

- ・自分で口を動かして食べてほしい
- ・食べ物を噛むことを覚えてほしい
- ・歯ブラシを噛まずに歯磨きができるようになってほしい

## 教員の願い

- ・食事中に泣く回数を減らし、安全に食事を楽しんでほしい
- ・連続飲みやストロー飲みができるようになってほしい

# アドバイザーからの助言

## 【食形態について】

- ・食形態で大切なのは、「大きさ」ではなくて「固さ」である。また、きざみ食では噛む必要がないので、咀嚼への成長には繋がらない。咀嚼が必要な状態を徹底していく必要がある。
- ・きざみ食は口の中でバラバラになり、誤嚥の可能性が高くなる。また形状の異なる食物が混在すると、流れるスピードが異なるので、誤嚥に繋がる。
- ・現在、押しつぶし期と乳児嚥下が混在している状態なので、咀嚼が必要な状態を徹底していかなければ、伸びてはいかない。口の動きを高めていくためにも、適切な食形態に変更する必要がある。



- ・きざみ食からソフト食へ
- ・とろみ剤でまとまりやすく

# アドバイザーからの助言

## 【水分摂取の方法について】

- ・水分の摂取時に、顎が上を向き、口が開いた状態で飲み込んでいる。流し込んでいるような状態なので、誤嚥の可能性がある。
- ・自分から飲もうとせず、水分が口に入ってくるのを待っている。量も適量かどうかわからない。
- ・ストローを使うことで、自分の意思で飲む速さや量を調整できる。ストローを使ってみてはどうか。



- ・口唇閉鎖して飲み込む練習をする
- ・ストローの練習を取り入れる

# アドバイザーからの助言

## 【姿勢について】

- ・食事中に筋緊張が強くなっており、手が常に顔の横まで上がり、食べにくさを感じているように見受けられる。食べることが好きなので、興奮しているのかもしれないが、緊張を緩和すると良い。
- ・支援は、椅子に座った状態で行うようにする。立った状態で行うと、スプーンが上から入るので、顎も上を向き、誤嚥の危険性が高まる。
- ・姿勢を整えることで、筋緊張のコントロールが可能となり、本人も過ごしやすく、様々な動きに繋がっていく。



- ・座位保持装置付車椅子の角度を90度にする
- ・机を、クッションに変更する
- ・支援は、椅子に座った状態で行うようにする

# 助言を受けての見直し

## 【食形態について】

- ・きざみ食にとろみをつける
- ・水分もとろみをつける

## 【水分摂取の方法について】

- ・口唇閉鎖して飲み込む練習をする
- ・ストローの練習を取り入れる

## 【姿勢について】

- ・座位保持装置椅子の角度を90度にする
- ・机を外し, クッションにする
- ・支援は座って行う

# 保護者・家庭との連携

## 面談－食事の指導について

参加者：保護者（祖母）・学部長・担任

内容：担任より給食の様子を報告  
専門家からの助言を伝える  
保護者より食事の様子を聞く  
今後の指導方針について説明

## 情報交換

- ・連絡帳に学校での給食の様子を書き込んで情報提供を行うようにしている
- ・送迎時にも給食の様子を伝えたり、家庭での食事の様子を聞くなど情報交換を行うようにしている



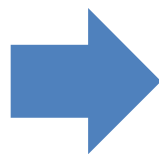
# 指導の手続き

【食形態について】

・きざみ食，水分にとろみをつける。(ポタージュ状)

※ソフト食への変更は不可能であった。

指導前



指導後

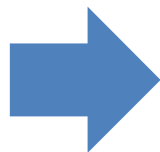


# 指導の手続き

## 【コップでの水分摂取について】

- ・水分摂取時も座位保持装置椅子の角度を90度に起こす。
- ・支援者が口唇閉鎖を支援し、促す。  
口唇閉鎖をしている状態でも、流し込むだけにならないよう、上唇が水面に触れ、口に入るか入らないかの状態で待ち、自分の意思ですすめるのを待つようにする。

指導前



指導後



# 指導の手続き

## 【ストローの練習について】

- ・蓋を押すと中身が出るストローマグを使用して、ストローの練習をする。
- ・ストローから水分が出るか出ないかのところで止め、吸うのを待つ。「吸うと水分が入ってくる」という条件付けをするようにする。
- ・口唇閉鎖の支援は、不用意に顎や唇に触れると、不快刺激になり、緊張を高めてしまうので注意して行う。唇を閉じるのではなく、下顎をゆっくり上げるようにする。



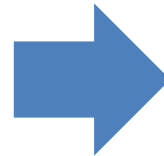


# 指導の手続き

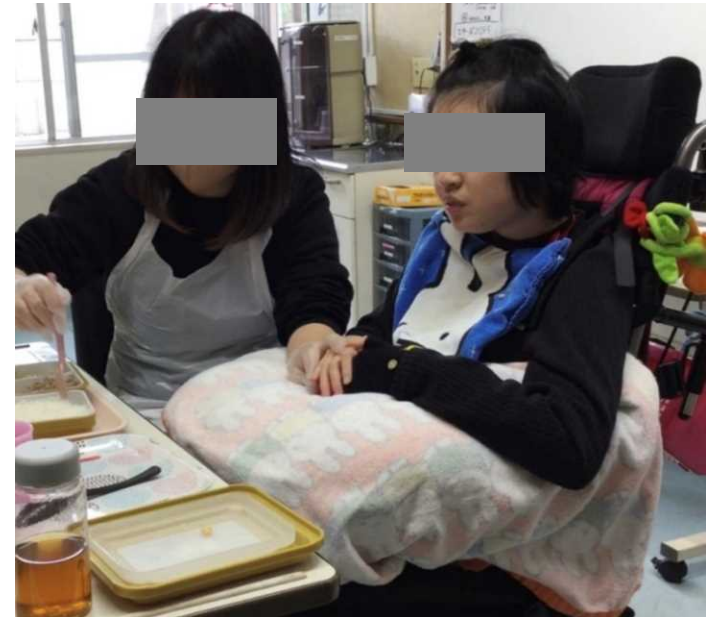
## 【姿勢について】

- ・座位保持装置椅子の角度を90度に起こし，お尻が下がらないように，座面にクッションを敷く。
- ・座位保持装置椅子に机を装着していたが，少しでもリラックスできるように，クッションに変更して，手が上がらないように，支援者が軽く押さえるようにする。
- ・支援者は座って食べさせるようにする。

指導前



指導後



# 指導の成果

## 【生徒の変容】

- ・とろみをつけることで、食べこぼしが少なくなった。  
嚥下もスムーズになった。
- ・ストローの練習を行ったことで、コップを下唇の上に置くと、自ら上唇をおろすことができるようになった。また、自ら口を動かし、連続飲みをすることもできるようになった。
- ・姿勢が安定したので、リラックスした状態で食事をとることができ、情緒の安定に繋がった。また、姿勢が安定したことで、食べ物やスプーンの動きを見るようになり、生徒が見た物を口に入れるようにした。そうすることで、より主体的な食事の時間を過ごすことができるようになった。

# 指導の成果

## 【教員の変容】

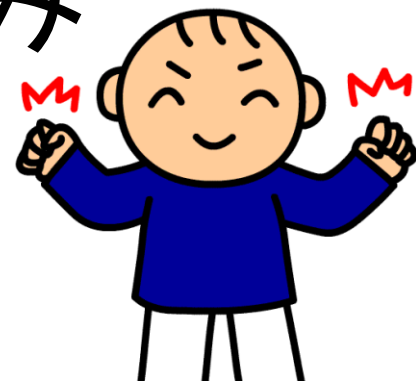
- 毎日、支援者が変わるため、食事の進め方に大きな違いがないよう、今までよりも話し合いの時間を十分に持ち、共通理解を図ってきた。また、食事場면을動画に残して、担当者同士で確認し合う回数を増やし、さらに共通理解を深めて取り組むようになった。
- 嚥下の発達段階を理解して、安全を意識して食事を進めていかなければならないことを支援者全員で話し合うことができた。
- 支援の方法が明確になったことで、指導に一貫性を持たせることができた。

# まとめ

- 指導を受ける前までは、対象生徒が泣いている理由を教員が独断してしまっている部分があった。  
指導を受け、姿勢や食形態など、食事の基本的なことを見直すことで、生徒の情緒も安定し、安全に食事を楽しめる日が増えてきた。
- 今回の指導を受け、改善すべき所を見直すことができ、生徒が安全に食べられるように支援することの重要性を再確認することができた。

# ここが成功のポイント

- 適切な実態把握，共通理解
- 指導の方向性の確認
- 日々の根気強い取り組み
- 評価後の見直し



「PDCAサイクル」に基づいた指導